

室内環境学会への期待

高木 敬彦

麻布大学 獣医学部 公衆衛生学第一研究室

〒229-8501 神奈川県相模原市淵野辺1-17-71

室内環境学会に入会させていただき数年が過ぎましたが、大会の時期は大学での公務だけでなく担当する講義や実習が集中しているため、なかなか参加できない状況が続きとても残念です。そのため執筆のご依頼をお受けしながら「会員の声」に掲載していただけるような内容とは程遠いものしか思い浮かばず稚拙な内容になりお恥ずかしい限りですが、会員の皆様にお読みいただければ幸いです。

私が最初に室内環境に関する研究に携わったのは15年くらい前のことでした。その当時、大学の所属研究室の教授から長期での学外研究を許され、厚生労働省 国立公衆衛生院(現 国立保健医療科学院)にて生物試験を用いた環境調査の仕事をしていました。まだその頃は大気浮遊粒子の変異原性測定など、大量に試料が得られるものの測定などが中心でしたが、米国環境保護局(US EPA)への留学から帰国された同院 後藤純雄先生(本学会会員、現 麻布大学教授)にご指導いただいたのをきっかけに、室内空気汚染に関する研究も行うようになりました。

近年、愛玩動物を飼う人が増えており、その呼称も時代とともに「ペット」から家族の一員として大切な存在という位置付けから「コンパニオンアニマル」へと変わっています。ペットフード工業会の最新の調査(2007年)によると、国内における犬猫の飼育頭数は約22,711,000匹(犬 約12,522,000匹, 猫 約10,189,000匹)となり、これから団塊世代が定年を迎えるとともにその数はさらに増加するとのことでした。一方で飼育環境も変化してきており、犬で50%強、猫で60%強が主として室内飼いになっています。このため室内環境を考えた場合、多くの先生方のご研究から犬や猫などのコンパニオンアニマルの存在は、その毛や唾液などがアレルゲンとなってヒトへの健康被害が発生するため加害者となりうるものが

あります。一方、日常生活や建材等から室内に漏出する化学物質によりコンパニオンアニマルは被害者にもなっていると考えられます。最近ではコンパニオンアニマルの寿命は獣医療の進歩やペットフード内容の充実により長寿化(犬猫では16才以上が3~5%)の傾向にあり、これに伴ってヒト同様に「がん」などの病気も多くなっています。これには日常生活における室内空気中の様々な化学物質への経気道暴露によって引き起こされるものも否定できないと考えられますが、室内の化学物質に起因するコンパニオンアニマルへの健康影響についての研究はあまり行なわれておらず、その詳細には不明な点が多いのが現状です。このため室内環境学会における様々な研究成果は獣医界にとっても貴重なものであり、本学会がますます発展され、多くの知見が見出されていかれることに大きな期待を寄せています。

最後に私が勤務する麻布大学について少しだけ紹介させていただきます。本学は創立以来110余年の歴史をもち、動物と人と環境の共生をめざした「地球共生系」をテーマにしています。

大学の組織は、獣医学部(獣医学科、動物応用学科)と生命・環境学部(臨床検査技術学科、食品生命科学科、環境科学科)で構成され、大学院も獣医学研究科および環境保健学研究科があります。

もしよろしければ、詳しくは大学のホームページをどうぞご覧ください。